

無形而致者皆曰風。詩序曰：風，風也。教也。从虫，凡聲。凡，古音扶音切。風，古音孚音切。風動蟲生，故蟲八日而風。以動之，教以化之。劉熙曰：風，汎也。故也。从虫，凡聲。下，此說从虫之意也。大戴禮：淮南書皆曰：二十九日，凡風之屬皆从虫。依韻會：此十字在从虫，八日化也。謂風之大數盡於八，故蟲八日而化。故風之字从虫。凡風之屬皆从虫。

〔類聚名義抄〕吹音衰カセ、フク、〔同風〕風方隆反、カセ、 颺カセ、 颺カセ、

〔下學集〕上地颺カセ 颺也、颺音弗、 颺音弗、

〔和爾雅〕天一風カセ 颺天地之氣、 風カセ 風並古文、 颺カセ 颺風自孔、 順風カセ 逆風カセ 颺カセ 颺風聲、

〔書言字考節用集〕乾一坤一順風カセ 颺風カセ 颺風五雜組、海風也、以、 沖津風カセ 颺風和俗、

〔日本釋名〕天上風カセ 風カセ ふかせなり、虚空よりふかする也、但上古のことば、其名づけし意はかりがたし。

〔東雅〕天一風カセ 義不詳、古語にサといひ、又カザといひし、皆是其語の轉せしにて異なる義ありとも聞えず、舊事紀に、陽神朝霧を吹撥ふの氣、化して風神となれりなどいふ事は、見えけれど、カゼといふ義の如きは聞えず、古語にカゼをサとのみ云ひしに似たり、萬葉集抄に、カは詞の上の助なり、弱きをカヨリといふも、則ち細きをカホリキといふが如しと見えたり、またセとは狭也とも見えたり、追をセマル風相薄るなどいひしは、事の如くなりけん、風相薄るなどいひしは、事の如くなりけん、

〔倭訓栞〕前編六六かせ 風をよめり、かせ反け、氣の義なるべし、又生すの義也、物風を得て生化す、よて風字虫に从へり、神代紀にも朝霧を吹撥の氣、風神となるといへり、風に陰陽あるは神代紀に見えて、春夏の風は物を吹あげ、秋冬の風は物を吹おとすも、理の自然なるべし、蠡海集には、春の風は下より升起、夏の風は空中に横行すともいへり、倭名鈔に微風をこかせとよめり、風はやみは疾風をいふ也、風の姿は物によせていふ也、風ひやかば冷なる也、字書に颺を風涼と注せり、風ほめくは新撰字鏡に颺をよめり、風をいたみは、つよく吹をいふ、風のたよりは、そことなく傳へ

はめくは新撰字鏡に颺をよめり、風をいたみは、つよく吹をいふ、風のたよりは、そことなく傳へ